食を見付けない、そこで、いつもの通り後について來た狐を捕つて食はうとした。狐は驚いて、何故私をお食ひになるのですといつて歎くと、獅子は、「なに、平生、己の食べ物を分けてやつて、お前を肥やして置いたのは、全く今日の樣な時の爲にするのだ」といつて、とう〳〵殺して仕舞ひました。

怠惰者の祈禱

三河西加茂郡筋生村　近藤登喜子

或る處に、仕事と云つたら爪の垢程もせぬと云ふ怠惰者がありました、家は、だん〳〵貧乏になりそれに反し、子は、思はぬ程殖え遂には日に三度の粥水が呑めかねる樣になりました、或日の事、妻は夫に向ひ、アヽ妻程因緣の惡いものは、世につれあらまじと、嘆き訴へました、すると、夫、私も最前から、妻子が不憫である、どうにかせむと、日夜心を痛まして居る、ヨシ今から氏神樣に祈誓を掛け幸福を與へて貰はん、とすぐ其の日から七日の斷食祈誓を掛け一心不亂に幸福を祈りました、すると六日目の夜丑の刻頃、氏神樣が、白髮の翁に化けて出てきまして聲を怒らし、これ怠惰者め、其の方の斷食して幸福を祈るは全く感心は出來ない、斷食は其の方の常なり、祈るなら滿腹になつて祈れ、と言ひ放して消へ亡くなりました、怠惰者は七日の祈誓も水の泡となりて家に戻りました、其れと云つて家内食はずに居る譯にはをれぬ、氏神樣へ祈るには空腹では聞き届けがない、さて困つたと手を拱ぬいて考へて居りました不圖思ひ付き、自家に祭りある大黑樣に祈誓を掛

けん、今度は三七二十一日の間夜丑の刻より夜明がたまで、夫婦力を合せ、一生懸命に祈つて居ました、すると、廿日の夜疲れて二人りともねむり初め、終に夢を見ました、其の夢が二人りとも同じで、大黒様が金錢を得る方法を敎へて遣る明朝來い、との言葉を聞きました、依て二人りは嬉しく喜んで、夜の明くるを待て、身を清め、恐る〳〵大黒様の前へ行き仰向きますと、神棚から七夕紙が下つて居ました、受けとつて、夫婦共に讀むで見ますと

金錢は此の世の中に預け置く
慾ーくば遣るに働いて取れ

二人りは、毎日ねころんで居て、金錢を貰ふ積りであつたに、案外なるに驚きました、致方がありませんから、其の翌日から日傭取りに出掛けましたか、とう〳〵仕舞には、大黒様のお告の様に、澤山なお金が出來ましたとさめでたし〳〵